

2019年5月19日

「はじめてのキリスト教」説教要約

私たちが信じる神

(詩篇47・1〜10)

一、47篇をめぐって

ユダヤ教の伝承によりますと、詩篇47篇は新年の幕開けの際、エルサレムの神殿で7回歌われたとのこと。その場合の神殿とは、ソロモン王が建設した第一神殿ではなく、紀元前515年に総督ゼルバベルの陣頭指揮により完成された第二神殿時代のことです。詩篇47篇が、新年を始めるに当たってふさわしい詩篇と受け止められたからなのであります。

では、教会は47篇をどのように用いたのでありましょうか。初代教会は主イエスの昇天を賛美するために用いたとのこと。ちなみに「昇天」とは、イエス・キリストが死者の中から復活して四十日後に天に上げられたことを指す言葉です。

二、神はどのようなお方か

聖書が指し示している神は、どのようなお方なのでしょう。

ほめたたえられるべきお方

1節をご覧ください。〈すべての国々の民よ。手をたたけ。喜びの声をあげて神に叫ぶ。〉と歌われています。「手を叩く」「喜びの声をあげる」は、造られた

ものである人間が、造り主である神をほめたたえる表現です。私たちが神さまにできることは何なのでしょう。神をほめたたえることです。

恐れられるべきお方

2節、3節をご覧ください。〈まことに、いと高き方は、恐れられる方。全地の大いなる王。国々の民を私たちのもとに、国民を私たちの足もとに従わせらる。〉と歌われています。イスラエルが主なる神を救い主として捉えたのは、エジプトで奴隷状態から解放されて以来のことです。ですが、その後イスラエルは神の御意思に聞き従いませんでした。すなわち律法の言葉に従いませんでした。それゆえに、国は北王国と南王国に分裂し、北王国イスラエルは紀元前722年にアッシリヤによって滅ぼされ、南王国ユダは紀元前597年にバビロンによって滅ぼされ、神殿も破壊されました。しかしその後、ペルシヤの王クロソ2世の勅令により、ユダヤ人は祖国に帰り、神殿を再建することができました。途中サマリヤ人の妨害があり、たいへん苦労しましたが、紀元前515年に第二神殿が完成されました。長い年月の流れの中で、イスラエルには「歴史を支配しているのは神である」という思いが一人ひとりに浸透しました。ですから、2節にありますように、〈まことに、いと高き方は、恐れられる方〉なので

す。この信仰の財産は、そのままキリスト教会に受け継がれました。ガラテヤ書4章4節に〈しかし定めの時が来たので、神はご自分の御子を遣わし、この方を、女から生まれた者、また律法の下にある者となさいました。〉とありますが、イエス・キリストが生まれられたのは、神の「定めの時」でした。

いと高きお方

5節をご覧ください。〈神は喜びの叫びの中を、主は角笛の音の中を、上って行かれた。〉とあります。旧約の人々は、神を「いと高き方」として捉えました。初代教会は、5節の〈神は喜びの叫びの中を、主は角笛の音の中を、上って行かれた〉に、キリストの昇天を思い描いたようです。

神が、私共の知性を超越するいと高きお方であると知りますと、何が起こるのでしょうか。いきなり、私共の実生活に適應してしまえますが、人と比較してしまふ縛りから解放されるようになります。いと高きお方である神を思わずに世の中を渡り歩きますと、人との比較の中で生きるようになります。人と比較して生きて行きますと、多くの人が劣等感に苛まれるようになります。ごく一部の人が優越感に浸るようになります。人生を勝ち組、負け組で分けるようになりません。まさしく、百害あって一利なしです。

三、キリストによって

キリスト教会にとって神の言葉である聖書の中心はイエス・キリストです。そこで、詩篇47篇にイエス・キリストを見いだすならどうなるかについてお話をしたいと思います。

さきほど、神はほめたたえられるべきお方である、神は恐れられるお方である、神はいと高きお方であると申しました。その神は、どなたなのでしょう。つまり、イエス・キリストです。キリストは神でありながら、人として生まれられました。神が人となられたお方がイエス・キリストです。ところが、イエス・キリストは三十歳にして十字架刑で死んでしまわれました。人が神を殺したという凶式になります。しかし、そうなることを許されたのは神です。神は聖なるお方です。義なるお方です。神に妥協はありません。したがって、人が犯した罪は義なる神が罰します。では、神はどこに罰を下されたのでしょうか。独り子なる神イエス・キリストです。ですから、キリスト信じる者は「私の罪は赦される」と知ります。

聖書が指し示す神は、そういうお方です。だから私たちは神をほめたたえます、イエス・キリストを畏れ敬います、父・子・聖霊なる神をいと高きお方として信じ、あがめます。